障害者が参加できない環境を私達が作ってしまっている、変えていかなければ

修士課程１年　鈴木莉歩

視覚障害者のリハビリテーション指導や点字の出版、視覚障害者向け音声読書機の開発、障害者向けの支援に関する研究を仕事にしておられると聞き、目が見えなくても人々が活躍できる時代に発展したと感じました。しかし、視覚や聴覚障害者も不自由なく暮らせているとは言えない中で、盲ろう者はより孤立してしまう環境にいると知ることができました。

盲ろう者という言葉を今回の講義で初めて聞いたため、日本では法的に定義されていないことや生活実態がほとんど把握されておらずサポートが行き届いていない人が多くいる可能性が高いことも驚きました。また、盲ろう者は視覚障害と聴覚障害を併せ持つ人を示すため、受傷時期によってコミュニケーション手段が異なり、支援の整備や交流の場も設定しづらい現状であると理解できました。難しいことだとは思いますが、まずは盲ろう者への定義や通訳、日常生活支援について早急に整備し、一人の人間としてもつ情報を知る権利が守られてほしいと強く感じました。また、フォーマルサポートの整備を待ちつつ、インフォーマルなサポートを構築していけば少しずつ生きやすい世界を作れるのではないかと思いました。

テレビでは字幕や副音声などが存在しており、バリアフリー化は進んでいると勝手に考えていました。ですが、映画となると多くの人と同じ空間で見るため、課題も多いことに今回の講義で気づくことができました。スマートフォン等を利用して以前よりも映画が見やすくなったものの、全ての映画が対象になるわけではなく、バリアフリーに対応することが当たり前になるのはまだ遠いかもしれないと感じました。また、映画のような人々の娯楽となる部分のバリアフリー化が進んでないことは、生きる楽しみを奪っていることにもなりかねないと思いました。映画だけでなく、ライブやミュージカル、配信など様々な娯楽が少しずつバリアフリー化して多くの人が生活に潤いをもたらせることができる日が訪れたら素敵だと思いました。

大河内先生は、人が少しでも違う人の存在を意識することでバリアの高さは変わってくると話してくださいました。今回私が盲ろう者という言葉や現状を初めて知ったように、障害をもつ人の存在や様々な障害があることを多くの人が知り意識するだけでも、たくさんの人が生きやすくなり、またサポートや参加する仕組みがある社会へと進んでいくと感じました。障害があるからできないのではなく、障害者が参加できない環境を私達が作ってしまっていると認識し、変えていかなければいけないと思うことができました。

この度は、講義してくださり本当にありがとうございました。たくさんの学びを今後に活かしていきたいと思います。